



TITLE:

# 前漢後期における中朝と尚書--皇帝 の日常政務との関連から

AUTHOR(S):

米田, 健志

---

CITATION:

米田, 健志. 前漢後期における中朝と尚書--皇帝の日常政務との関連から. 東洋史研究 2005, 64(2): 253-286

ISSUE DATE:

2005-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/138167>

RIGHT:

# 東洋史研究

第六十四卷 第二號 平成十七年九月發行

## 前漢後期における中朝と尙書

—— 皇帝の日常政務との関連から ——

米 田 健 志

はじめに

第一章 中朝官の定義——附・尙書——

第二章 禁中の機能

第一節 皇帝にとっての禁中

第二節 禁中における政務

第三章 皇帝の政務と尙書

第四章 中朝官の職務

第一節 給事中・諸吏

第二節 侍中・中常侍

第三節 領尙書事

第五章 中朝の變遷

おわりに

## はじめに

前漢半ばの昭帝時代に皇帝の側近集團として中朝<sup>(1)</sup>が出現し、それ以前からある尙書とともに中央政府における重要性を増し、時を経た唐代に至って政府の中樞たる三省へと成長してゆく萌芽となったことは、すでに周知の事實であろう。これを反映して、漢代官僚制度研究の中でも尙書と中朝に關しては、とくに多數の研究がこれまでに發表されている。<sup>(2)</sup> それでは何故筆者がここで屋下に屋を架すかのごとき試みを行うのかと言え、そうした研究蓄積の厚さにもかかわらず、尙書と中朝についてはなお不明瞭な點が多いように筆者には思われるからである。私見では、その原因の一つは從來の尙書・中朝研究の出發點が、外戚・宦官をも絡めた權力闘争、言い換えれば政治史的側面からの分析にあつたからであろう。ついで分析の主眼は中朝と外朝（中朝に屬さない中央官僚の總稱）との相互關係、いわば中央政府全體の權力構造における中朝の位置づけは如何という點へと移されはしたが、その場合でも中朝と外朝とは抽象的かつ相對的な中外の關係としてのみ捉えられ、それゆえ中朝が皇帝の側近集團であることが當然の前提として無批判に受け入れられてきた。しかし顧みれば、中朝を構成する個々の官職がいかなる職掌・機能を有しており、かつまた中朝とは宮中のどのような場所であり、尙書と中朝官は皇帝の政務遂行にどのように關つていたのか、という純粹に制度的な側面からの分析はほとんどなされてこなかったのである。以上、本稿を草する所以である。

## 第一章 中朝官の定義——附・尙書——

中朝官が皇帝の側近であること、そしてどの範圍の官職を含むのかについては、すでに先行研究で明らかにされているが、論述の都合上あらためて示しておきたい。中朝官の定義を明確に示した唯一の史料は、

孟康曰く、中朝とは内朝なり。大司馬・左右前後將軍・侍中・常侍・散騎・諸史を中朝と爲す。〔漢書〕卷七七劉輔傳

注)

であるが、ここに挙げられた侍中・散騎などが、『漢書』卷一九下百官公卿表下（以下、百官表と略稱。また特に斷らぬ限り、史料の出處はすべて『漢書』である）では、「加官」すなわち本官に付加される官職だと記されていることから、同じく百官表で加官とされている諸曹（左右曹）と給事中もまた中朝官に含まれると結論されている。ここまでは、諸家の一致するところであり異論をさしはさむ餘地はない。ただし、これらの中朝官の職掌を次に挙げてみると、

大司馬：武事を掌る（百官表）。

將軍：兵および四夷を掌る（百官表）。

侍中：禁中に入るを得る（百官表）。入りて天子に侍す、故に侍中と曰う（百官表注）。

中常侍：禁中に入るを得る（百官表）。

散騎：騎して乘輿の車に並ぶ（百官表）。騎して散従し、常職は無し（百官表注）。漢武元鼎三年、初めて散騎を置き、

俱に顧問應對を掌る（『漢官儀』卷上）。秦および前漢は散騎および中常侍各一人を措く。散騎は騎馬して乘

輿の車に並び、可を獻じ否を替く（同上）。

諸吏：（非）法を擧げるを得る（百官表）。日ごとに朝謁を上り、尙書の奏事を平し、分ちて左右曹と爲す（百官

表注所引『漢儀注』『漢舊儀』）。

諸曹：尙書の事を受ける（百官表）。

給事中：顧問應對を掌る、位は中常侍に次ぐ（百官表）。左右に侍従するを掌る、員無く、常に中に侍す（百官表注所引『漢官解詁』）。諸曹給事中は日ごとに朝謁を上り、尙書の奏事を平し、分ちて左右曹と爲す。以て殿中に事える有り、故に給事中と曰う。多く名儒・國親が之と爲り、左右顧問を掌る（『太平御覽』卷二二所引『漢儀注』）。

と、一覽して見てとれるようにその職掌は雜多であり、「禁中に入るを得る」のように果たして職掌と呼ぶべきなのか躊躇を覚えるものもある。これでは何故これらの官職が中朝官として一括されるのかという、その理由がにわかには理解しにくい。しかし先行研究ではこの點を等閑視したまま、漠然と「天子的近臣」「皇帝の側近官全體を總稱する」などと定義するにとどまるのである。筆者が先に從來の中朝研究を評するに際して、「抽象的」という言葉を用いたのは、こうした中朝官の定義の曖昧さも含めてのことである。以下本章では、右に挙げた諸官が中朝官として一括される理由は何か、そこに何らかの共通性は見出せるのかという點について考察してみたい。

中朝官はまた「中朝者」<sup>(4)</sup>と呼ばれることもあるが、これは「中に朝する者」と理解できよう。そして、この「中」とはどこか言えば、侍中・中常侍の「職掌」が「禁中に入るを得る」であることを考慮に入れると、禁中である可能性が高いと考えられる。禁中とは何かについては、まず次の二つの史料がある。

伏儼曰く、蔡邕云う「本とは禁中と爲す。門閤には禁が有り、侍御の臣に非ざれば妄りに入るを得ず。行道の豹尾の中も亦た禁中と爲す。孝元皇后の父の名は禁なれば、之を避けて、故に省中と曰う」と。(卷七昭帝本紀注)

(江) 充は巫蠱を治めるを典るに、既に上(武帝)の意を知り、「宮中に蠱氣が有り」と白し<sup>も</sup>言い、宮に入り省中に至り、御座を壊して地を掘る。(卷六三武五子傳)

すなわち禁中とは、省中とも呼ばれる宮中の一區畫のことであり、「侍御する者」以外は入ることを許されなかった空間である。禁中とそれ以外の區畫との間には、後掲の史料に見えるような省闔・省門・省戸などと呼ばれる門戸があり、外部からは嚴重に隔てられていた。この禁中は次章において詳しく見るように、皇帝の私的な生活空間であり、侍中・中常侍はそうした「禁中に入るを得る」「侍御する者」ということになる。例えば、

元帝即位して、駙馬都尉侍中と爲り……上の疾に寝るや、……丹は親密の臣なるを以て侍して疾を視るを得る。上の間に獨り寝る時を候い、丹は直ちに臥内に入り、頓首して青蒲の上に伏して……。(卷八二史丹傳)

とあるように、史丹は侍中である故を以て元帝の臥内すなわち寢所に入つてゆくことができたのである。

それでは他の中朝官はどうだったのだろうか。果たして禁中に入ることを許されていたのだろうか、以下この点について検討してゆこう。

第一に給事中だが、先に引いた『漢官解詁』に「常に中に侍す」とあることから、禁中に入り得たことは想像に難くないが、さらに成帝時代に光祿大夫・給事中から北地太守に異動した谷永の上奏文には次のように言う。

臣永は幸いにして給事中なるを得て、出入<sup>およそ</sup>三年、干戈を執り邊垂を守ると雖も、思慕の心は常に省闈に存す。（卷八 五谷永傳）

ここから給事中が省闈の中に入ることを許されていたことが確認できる。第二に、散騎の職掌は「騎して乘輿の車に並ぶ」ことだとされているが、「騎して」とある以上、これは皇帝が宮殿から外出する際のことを言ったものであるが、その際の威儀は次のようなものであった。

服虔曰く、大駕の屬車は八十一乗、三行を作し、尙書・御史は之に乗る。最後の一乗に豹尾を懸け、豹尾より以前は皆な省中と爲す。（卷八七上揚雄傳上注）

すなわち皇帝の車馬行列においても禁中の範圍が定められていることが分かる。先に引いた昭帝本紀注に「門閣には禁が有り」と見えるように、本来、禁中とは宮殿内の一區畫を示す語であったと思われるが、そこから敷衍して、宮殿の内外を問わず、皇帝の起居する空間すべてを指すようにもなったのであろう。いずれにせよ、騎乗して乘輿（皇帝）の車に並走する散騎は、少なくとも行幸の道中においては禁中に居ることになるのである。第三に將軍については、

大將軍（衛）青が中に侍すに、上（武帝）は厠に踞して之を視る。（卷五〇汲黯傳）

という史料があり、大將軍衛青が侍していた厠側というのは禁中である可能性が高い。さらに、卷六九趙充國傳には、次のような史料がある。

初め、破羌將軍の武賢が軍中に在る時、中郎將の印（充國の子）と宴語するに、印が道<sup>い</sup>うに「車騎將軍張安世は始め嘗て上（宣帝）を不快ならしむ、上は之を誅さんと欲するも、印家の將軍（充國）は以爲えらく『安世は本と囊<sup>い</sup>を持ち筆を簪<sup>さ</sup>して、孝武帝に事えること數十年、忠謹なりと謂はれたれば、宜しく之を全度すべし』と。安世は是を用て免れるを得たり」と。充國の還りて兵事を言うに及んで、武賢は罷めて故官に歸る。深く恨んで、上書して印は省中の語を泄らすと告す。

ここで、「省中の語を泄ら」した罪で告發されているのは、直接には子の趙印だが、それ以前に禁中の出來事を彼に語ったのは父の趙充國であろう。西羌遠征で名を馳せた趙充國の主な履歴は、中郎將↓水衡都尉↓後將軍兼水衡都尉↓蒲類將軍↓後將軍兼少府というものだが、この間の彼には侍中・給事中などを加官された形跡が無い。それにもかかわらず趙充國が禁中における宣帝と張安世の確執を知り、それを取りなすことができたのは、後將軍の身分によって禁中に入ることを許されていたからであろう。

これ以外の諸曹・諸吏および大司馬については、残念ながら禁中との關わりを窺わせる史料は見出せない。ただし、大司馬は百官表では「將軍の號に冠す」とされており、事實、前漢において大司馬に就任した者の大多數は大將軍や車騎將軍などを兼任している。これについて吉村昌之氏は、大司馬とは將軍を本官とする者に付加されると指摘されており、<sup>(5)</sup>そうすると大司馬に就任した者は、自動的に將軍としての資格を以て禁中に入り得ると考えてよいであろう。諸吏については、「日ごとに朝謁を上り、尚書の奏事を平し、分ちて左右曹と爲す」（前掲『漢儀注』）と給事中と同じ職掌を與えられており、また、ここに見える「朝謁を上る」ということは、

五官（中郎將）は光祿勳に屬すも、朝謁を上るを得ず。左右曹・諸吏を兼ねれば、朝謁を上るを得る。〔漢舊儀〕卷上）

と、給事中だけではなく、左右曹（諸曹）・諸吏に關しても規定されており、諸吏・諸曹が給事中と同じく禁中に入り得

た可能性は高いと思われる。

以上、若干不明瞭な点はあるものの、大司馬・將軍・侍中・中常侍・散騎・諸吏・諸曹・給事中の共通性は、禁中への出入りを許されていたことであり、それゆえに、一見雑多な「職掌」を有するこれらの官職が、中朝官として一括されるのだと結論してさしつかえないだろう。なお、註(4)のように「將軍・中朝者」「左將軍彭宣與中朝」という表現も見られることから、中朝とは狹義では、將軍およびそれを本官とする大司馬を除外した、侍中以下を指したのだと考えられ、以下本稿において中朝官という場合もこの意味で用いたい。また附言しておくべきは、これらの中朝官は全體として禁中における皇帝の側近集團を形成してはいたが、すでに藤田高夫氏によつて指摘されているように、個々の中朝官の間には何らの統屬關係も無かったという点である。<sup>(6)</sup>さらにまたこの事實は、中朝という側近集團は、その當初において明確な機能を有する組織として創設されたものではないことを示唆する。個々の中朝官の設置の理由や時期を明示する史料はほとんど見出せないが、列傳の記載によれば初見の時期にはかなり隔たりがあり、<sup>(7)</sup>「職掌」の多様性を考えあわせると、個々の中朝官はそれぞれ異なる時期において、それぞれ異なる目的に應じて設置されたものであり、それらが禁中に出入りするといふ共通性を有するがゆえに、のちに中朝と總稱されるようになったのだと推測できよう。

ところで、孟康が列舉した中には含まれず、また加官でもなく、それゆえ漢代において中朝官の範疇に含まれていたか否かも不明ではあるが、中朝が論じられる際には必ず言及される重要な官職、すなわち尙書もまた禁中への出入を許されていたことを指摘しておかねばならない。まず、次の二つの史料を挙げよう。

如淳曰く、天子の物を主るを尙と曰い、文書を主るを尙書と曰う。……『漢儀注』には省中には五尙が有るといふ。

(卷二惠帝本紀注)

『漢儀注』に曰う「省中に五尙有り。即ち尙食・尙冠・尙衣・尙帳・尙席なり」と。或いは云う「秦は六尙を置く、尙冠・尙衣・尙食・尙沐・尙席・尙書を謂う」と。(『通典』卷三六職官典八・殿中監)



ここでは、五尚であるか六尚であるか、また名稱にも若干の異同があるものの、いずれにせよ「尚×」と名付けられた官が禁中に置かれており、尚書がその一つであることが示されている。残念ながら、ここに列擧された官のうち史料に現れるのは、尚書を除けば次の尚席一例のみであるが、確かに、禁中での宴席に奉仕していたことが見えている。

上（景帝）は禁中に居り、亞夫を召して食を賜うに、獨だ大蔵のみを置いて、切肉は無く、又た箸を置かず。亞夫は心に平らかならず、顧みて尚席に謂いて箸を取らしむ。（卷四〇周亞夫傳）

問題の尚書については、

省中にて使令を待つ者は、皆な官婢なり。年八歳以上を擇んで、縁を衣せて、宦人と曰い、省門を出るを得ず。都監を置く。老いた者は婢と曰い、婢は宦人をして尚書に給使させる。（『漢舊儀』卷下）

『漢官』に曰く、尚書郎は明光殿にて事を奏す。省中は皆な胡粉もて壁を塗り、その邊は丹漆を以て地とし、故に丹堦と曰う。尚書郎は鷄舌香を含み、その下に伏して事を奏す。（『太平御覽』卷三二・職官一九・黃門侍郎）

とあるように、省門から出ることを許されぬ「宦人」が尚書に給使すること、尚書郎が丹堦の下で「事を奏し」たことが記される。いずれも尚書が禁中において職務にあたっていたことを示している。<sup>(10)</sup> それでは、右に見てきたように中朝官や尚書が出入りする禁中とは、どのような空間であったのか、章をあらためて検討してゆこう。

## 第二章 禁中の機能

### 第一節 皇帝にとっての禁中

本節では、さまざまな中朝官や尚書が出入りする禁中とは、宮殿の主である皇帝その人にとってはどのような場所であったのかを考察してゆく。まずは、二三の史料を擧げてみよう。

昭帝を立てて太子と爲す。年は八歳。……明日、武帝は崩じ、戊辰、太子は皇帝の位に即き、高廟に謁す。帝の姉の  
 鄂邑公主は湯沐の邑を益されて、長公主と爲り、養を省中に共（供）す。（卷七昭帝本紀）

上（文帝）上林に幸するに、皇后・慎夫人従う。その（皇后と慎夫人の）禁中に在るや、常に坐を同じくす。（卷四九爰  
 盜傳）

晝漏が未だ盡きざること八刻に、廬監は茵次を以て婕妤以下を上<sup>のぼ</sup>せて後庭に至り、……刻盡きれば、簪珥を去り蒙被  
 して禁中に入れ、五刻にして罷む。卽し留れば、女御長が入りて、扶けて以て出づ。<sup>（1）</sup>（『漢舊儀』卷下）

これらからは、禁中が幼少の皇帝が養育される場所であり、また皇帝が成人である場合には皇后や夫人とともに暮らし、  
 また妻妾との夜の営みがなされる場所であることが理解できよう。そしてまた、卷四一樊噲傳に、

高帝は嘗て病みて、人を見るを惡んで、禁中に臥して、戸者に詔して群臣を入れるを得る無からしむ。……十餘日に  
 して、噲は乃ち闔を排して直入し、大臣は之に隨う。上は獨り一宦者を枕として臥す。

とあり、さらに尙冠・尙衣・尙食・尙沐・尙席・尙書の六尙（一説に尙食・尙冠・尙衣・尙帳・尙席の五尙）があつた、と  
 『漢儀注』（前掲）に記されるように、禁中には宦官や皇帝の衣食住に奉仕するさまざまな官職が置かれていたのである。  
 要するに、禁中とはまず何よりも、皇帝と皇后をはじめとする家族たちとの私的な生活空間なのである。したがって、

諸侯王の天子に朝見するに、漢の法では凡<sup>およ</sup>當四たび見ゆ。始め到れば、入りて小見す。……小見とは、禁門内に於い  
 て燕見し、省中に於いて飲するなり。士人の入り得る所には非ず。（『史記』卷五八梁孝王世家・褚少孫補筆）

という諸侯王の朝見儀禮も、劉氏の宗主である皇帝が、血縁者たる諸侯王を自らの私的な空間において接待するためであ  
 る。また、ここで禁中が「士人の入り得る所には非ず」とされた點に關しては、例えば哀帝時代の鮑宣は、諫大夫に任  
 じられ未央宮内の高門殿に宿直所を與えられていたが、上奏文において、

高門は省戸を去ること數十歩。見えんと求めること出入<sup>やそ</sup>二年なるも未だ省られず。……願くは數刻の間を賜り、翬翟

の思いを極め竭くさば、退きて三泉に入りて、死すとも恨む所亡し。(卷七二鮑宣傳)

と、禁中に通じる省戸の附近に居ながら皇帝に謁見できぬ不遇を嘆くのである。また、平帝の時に安漢公王莽が女を皇后に立てることを辭退し、王莽の伯母である太皇太后王氏がそれを承認した際に、

庶民・諸生・郎吏以上の闕を守りて上書する者は日に千餘人、公卿・大夫は或いは廷中に詣り、或いは省戸の下に伏して、咸言く「……願くは公の女を天下の母と爲すを得んことを」と。(卷九上王莽傳上)

と、公卿・大夫らが王莽の女の立后を請願しているのが省戸の下であるのも、彼らがその内部には立ち入り得ないからであらう。

以上のように、禁中とは皇帝と家族が生活をする私的な空間であり、また「侍御する者」ではない「士人」すなわち一般の官僚には立ち入りの許されない場所であつた。さらに先の趙充國傳に見えるように、禁中での出来事を外部に漏らすことは「漏泄省中語」とされる大罪であり、<sup>(12)</sup>それだけ禁中は機密性の高い空間であつた。<sup>(13)</sup>それゆえに中朝官が禁中への出入りを許されて内部事情を知り得ることは、一般の官僚には望むべくもない——鮑宣の嘆きの言葉の痛切さを見よ——特權だつたのであり、中朝官が「天子的近臣」「皇帝の側近官」とされるのも、この特權に由來するのである。ただし、中朝官は必ずしも常時禁中に滞在できたわけではなかつた。

侍中は舊と中官と俱に禁中に止まるも、武帝の時に、侍中の莽何羅は刃を挟んで逆を謀り(前八八年)、是れ由り侍中は禁外に出でて、事有れば乃ち入り、畢れば即ち出づ。王莽の政を乗るや、侍中は復た入りて、中官と共に止まる。

章帝の元和中(八四―八七年)、侍中の郭舉は後宮と通じて、佩刀を抜いて上を驚かせ、舉は誅に伏して、侍中は是れ由り復た外に出づ。(『續漢書』百官志三・注補所引の蔡質『漢儀』)

すなわち、前漢では武帝時代末から王莽の政權掌握の頃まで、および後漢の章帝元和年間以後には、侍中は何か用事のあらむたびに禁中に入ることができたが、その用事が終われば禁中から出なければならなかつたのである。後にも述べるよう

に、侍中は中朝官の中でも最も皇帝に近しい者が任じられた官であったから、それ以外の中朝官は、侍中に準じた扱いを受けたと考えられる。なお、『漢儀』の記述を裏返せば、武帝末以前および王莽時代から後漢初期には、侍中は中官（宦官）と同じように、禁中に二六時中滞在できたということになる。

禁中が皇帝の私的な生活空間であることは、右に見たとおりであるが、ところで、先に見たようにこの禁中において、皇帝の書記ともいべき尙書が「事を奏」していた（前掲『太平御覽』卷三二）という事實は、果たして何を意味するのであろうか。禁中とは單なる生活空間に止まらない、さらに別の機能を有する空間だったのであるか。節をあらためて、禁中を皇帝の政務との關係から分析し、あわせて尙書と中朝官がどのように関わっていたのか見てゆこう。

## 第二節 禁中における政務

ここでは、皇帝の宮殿を一般の官衙と比較したうえで、宮殿内部における禁中の位置づけについて考察してゆきたい。もとより皇帝の宮殿と官衙とは、その規模の大小も機能の多寡も桁違いではあるが、両者は當時の建築物における空間構造の原則を共有していたと想定できるのである。<sup>(14)</sup>

漢代において官衙に勤務する官僚は、長官から屬吏にいたるまで官衙に住み込みで職務を行っていたことは、すでに大庭脩氏が明らかにされており、<sup>(15)</sup> また近年では佐原康夫氏が、漢代の官衙の空間構造とそこに勤務する長官と屬吏の關係を分析している。<sup>(16)</sup> 佐原氏によれば、漢代の官衙の構造は丞相府を例にとれば、第一に敷地の周囲をとりまく屬吏たちの事務所がある區畫、第二に丞相が政務を執る「堂」とその前の中庭にあたる「廷」とがある區畫、そしてさらにその奥に第三の區畫であり長官の私的な空間にあたる「便坐」がある、という三重構造をなしていた。また第二の堂・廷の區畫は塀や回廊で圍まれており、ここに入出入りする門としては正門にあたる「中門」と、廷に日常的に入出入りする屬吏のための門である「閤」があった。そして、この三重の構造は丞相府のみならず郡太守府から縣寺にいたるまで、規模の大小の差はあ

るにせよ、あらゆる官衙に共通していたとするのである。

これを皇帝を長官に見立てて、その官衙たる前漢の都長安城に當てはめるなら、第一の區畫は未央宮の外部に置かれた丞相府などの中央官衙に、第二の區畫は未央宮の中心建造物である前殿に、そして第三の區畫は禁中に相當すると考えてよいだろう。<sup>(17)</sup>

そしてまた佐原氏は、官衙の便坐では長官が政務を執ることもあり、例えば後漢の九江太守宋均は「五日に一たび聽事」し、堂に出るまでもない書類の決裁などは「便坐」で済ますことも多かったろうと推定し、また景帝時代に蜀郡太守となった文翁は、

學官を成都の市中に修起して、下縣の子弟を招き以て學官弟子と爲す。……常に學官の童子を選んで、便坐に在つて事を受けしめる（師古曰く、便坐とは別坐なり、以て視事すべきも、正廷には非ざるなり）。（卷八九文翁傳）

と、便坐において視事したことを指摘する。このように官衙における便坐が、長官の私的空間であると同時に政務を執る場所でもあることを念頭に置いて見ると、皇帝の生活空間である禁中において、尙書が「事を奏」したこと、すなわち皇帝が政務を執っていたことは、何ら奇妙なことではないのであって、禁中もまた皇帝にとって私的空間であると同時に、政務を行う場所だったのである。章をあらためて、皇帝の政務がどのように行われたかを尙書および中朝官との關係から見てゆこう。

### 第三章 皇帝の政務と尙書

中國全土の支配者たる皇帝の行くべき職務は多岐にわたるであろうが、ここでは、さまざまな國家祭祀や高位高官の任命など、どちらかといえば非日常のかつ儀禮的な色彩の濃いものではなく、ごく日常的な政務の手續き、すなわち詔書の發布と上奏文の決裁について考察してゆきたい。

皇帝が日々処理すべき文書の分量がどの程度であつたかについては、例えば、始皇帝が毎日重さにして百二十斤にものぼる文書を、自ら筆を執つて決裁したという記録がある<sup>(18)</sup>。この時代には書寫材料としては紙よりも重い簡牘が用いられたことを差し引いても、その處理に費やされる勞力は膨大なものであり、皇帝の日常はこうした文書の決裁に追われる毎日だつたといつてよいだろう。ただし、始皇帝のように自ら筆を執るといふのは、むしろ例外であり、通常はその傍らには書記が居て文書の處理を補助もしくは代行していたはずで、この點は官衙における長官と屬吏との關係と何ら變わりはない<sup>(19)</sup>。では皇帝における書記、すなわち詔書の起草や上奏文に對する批答の作成を行う——唐代で言えば中書舍人にあたるといふ——官は、具體的にはどの官かと言へば、それは尙書にほかならない。

（尙書）侍郎は三十六人、四百石。本注に曰く、一曹ごとに六人有り、文書を作るおよび起草するを主る。（『續漢書百官志三』）

尙書の官屬を召して、脅すに白刃を以てして、詔板を作らしむ。（『後漢書』列傳五九竇武傳）

右の二例では、後漢では尙書が詔書を起草したことが明示されており、遡つて前漢においても同様だつたと考えてよいであらう。ただし、前漢の尙書に關しては、竇武傳のように明確な史料がなく、そのため從來は、鈴木虎雄氏のように前漢においては「王命を掌る専門の職官が無かつた」とする説や、大庭脩氏および大庭氏の所説を繼承した徐世虹氏のように、御史大夫が詔書の起草を行う「草制官」であつたとする説<sup>(20)</sup>が行われてきたようである。以下、とくに大庭説の當否については少々検討しておきたい。

大庭氏が「御史大夫＝草制官」の根據とされるのは、居延から出土した八枚の簡牘を大庭氏が一つの冊書として復原した元康五年詔書冊である<sup>(22)</sup>。この詔書冊においては、元康五年（前六一）の夏至の行事について、まず御史大夫が關係諸官の意見を取りまとめた上で、さらに自らが作成した具體的な行事實施案を提示して上奏文として皇帝に奉り、ついで皇帝がこれを裁可することで詔書としての效力を付與されて<sup>(23)</sup>、全土に公布される、という政策の決定・公布における一連の經

過が如實に示されている。ここから大庭氏は、

漢代の制書（引用者注：詔書のこと）の多くが「制詔御史（引用者注：御史は御史大夫のこと）」の句で始まることに意味を見出すべきで、皇帝は御史に對して方針を制書によつて示し、實行案の計畫進行を命じていることになる。要するに御史は……いわゆる「草制の官」であつて、文書の起草にも當つた。

と結論し、やがて御史の職務は尙書に代行されるようになっていったとするのである。

しかしながら、私見では大庭氏のこの所説には二重の誤解があると考ええる。第一に、「草制」Ⅱ「政策實施案の作成」とする點である。草制とは——漢代には見られない語であるゆえ、ここでは後代における語義を示すほかないが——例えば唐代においては、中書舍人もしくは翰林學士が「王言」の起草をする<sup>(24)</sup>ことである。これに對して、唐代の尙書省が關係諸官の意見を取りまとめた上で皇帝に裁可を請う際には、これを草制と呼ぶことはない。これを漢代に敷衍して考えるならば、元康五年詔書冊において御史大夫が行っているような、「政策實施案を作成」した上で皇帝に裁可を請うという行爲も、草制と稱すべきではないだろう。

第二に、同詔書冊において提示された實施案とは、あくまで御史大夫の言葉として奉られた上奏文なのであり、皇帝の裁可を経て結果として詔書としての效力を付與されたとはいえ、これを皇帝自身が發する言葉、すなわち王言と同一視することは出来ないという點である。<sup>(25)</sup>同詔書冊の中で、強いて王言にあたる部分を挙げれば、御史大夫の上奏文に對する裁可の文言「制曰可」のみであろうが、ただこの元康五年詔書冊からだけでは、この文言を誰が書くのか——皇帝自身か御史大夫か、それとも尙書か——は不明である。そこで、以下では別の史料によつて、御史大夫が王言の發布および上奏文の裁可に關わり得たか否かを検討したい。

<sup>(26)</sup>漢代の詔書のうち大庭氏のいわゆる「第一形式」は、皇帝が自らの意志で一方的に命令を下す際に用いられるものであり、あたかも唐代の王言に相當すると言えよう。そして、この第一形式の詔書の多くには、冒頭に「制詔御史」と御史大

夫に向けて發せられたことを示す文言が冠されている。もし御史大夫が、こうした第一形式の詔書の起草を行ったとするならば、自らが起草した詔書が自らに宛てて發布されることになり、そこに若干の手續き上の不合理性を感じざるを得ない。むしろ、少なくとも「制詔御史」と冠された詔書については、他の官によつて起草された、と想定する方が自然ではないだろうか。また、御史大夫の官衙すなわち御史大夫寺が置かれたのは、皇帝にさほど身近な所ではなかったと推測され、この點でも、御史大夫による詔書の起草を想定するのに躊躇を覺えざるを得ない。

ついで、昭帝時代に領尙書事の左將軍上官桀が、昭帝の兄の燕王劉旦および御史大夫の桑弘羊らと結託して、同じく領尙書事である大司馬大將軍霍光の失脚を謀つて、配下に霍光を誹謗する詐りの上奏文を奉らせた際のこと、卷六八霍光傳では次のように描かれる。

詐りて人をして燕王の上書を爲さしめて言く「……（光）は擅に莫府の校尉を調益す。光は專權自恣たり、疑うらくは非常のこと有らん。……」と。光の出でて沐する日を候司して之を奏し、桀は中より其の事を下さんと欲し、桑弘羊は當さに諸大臣と共に光を執え退けんとす。書は奏されるも、帝は下すを肯んぜず。

ここで詐りの上奏文を裁可・下達しようとするのは領尙書事たる上官桀であり、御史大夫の桑弘羊の役回りは、裁可された上奏文にもとづき霍光を逮捕することではない。ここから御史大夫が上奏文の裁可に關わり得ないことは明白である。ついで、一方の尙書に目を轉じると、先に引いた霍光傳の一文の直後には、

明旦、……上曰く「……朕はこの書の詐りなるを知る、將軍には罪なし」と。光曰く「陛下は何を以て之を知るか」と。上曰く「……校尉を調して以來、未だ能く十日ならず、燕王は何を以て之を知る得るか。且つ將軍の非を爲さんとするや、校尉を須たず」と。この時、帝は年十四なれば、尙書・左右は皆な驚く。

とあり、皇帝が政務を執る傍らに尙書が控えていたことが記される。また、過去に下された詔書の控えを保管していたのは尙書であり、また哀帝の時の尙書僕射鄭崇は、帝が祖母である傳太后の從弟傳商を列侯に封じようとした際に、「詔書



の案」すなわち受け取った詔書載せる臺を持つて立ち上がり諫めたという。<sup>(29)</sup>以上より、前漢において皇帝の書記として詔書の起草および批答の作成にあつていたのは、大庭氏の言うような御史大夫ではなく、皇帝の傍らに居た尙書であつたと考えるべきである。

ところで、尙書の職掌については、従来は「文書の取り次ぎ」、すなわち上奏文の皇帝への傳達および詔書の下達、という側面が重視されてきたようである。これはおそらく領尙書事が、

故事では、諸上書する者は皆な二封を爲して、其の一に署して副と曰い、尙書を領する者は先に副封を發いて、言う所不善なれば、屏去して奏せず。<sup>(30)</sup>（卷七四魏相傳）

という権限を有しており、且つこの権限が霍光没後における權力闘争の要因の一つだったためであろう。領尙書事と尙書との關係については後述するが、少なくとも、このような上奏文を握りつぶすような権限を、尙書令以下の尙書の諸官が有していたとの史料は見出せない。さらに官衙においても、受信文書の長官への取り次ぎと官衙からの文書発信とは、書記の職務の一つであり、尙書による上奏文の取り次ぎも皇帝の書記としての職務の一つにすぎず、必要以上に重視すべきではないと思われる。<sup>(31)</sup>

尙書の職務の具體的な手續きについては、残念ながらほとんど史料が無く明らかにできない。以下では、邊境の官衙における書記の職務について、簡牘史料によつて明らかにする點を二三示して、尙書の職務遂行の様相を窺う一助としておきたい。まず文書受信の手續としては、送られてきた文書は書記が受け取つて開封するが、この際にはとくに長官の面前で開封しなければならない場合もあった。その後書記は受信した文書について受信日簿を作成する、というものである。ついで文書発信の手續きは、まず書記が文書を作成して自ら署名するが、これはあくまで草案であり、そのままでは文書として正式の效力をもたない。文書を正式なものとするためには、二通りの方法がある。一つは草案作成の際に長官の名前の入る部分を空白にしておき、発信に先だつて長官がここに署名をするというものであり、いま一つは書記が長官の

名前をも書き入れた草案を長官に提出し、長官が常時所持する自らの官印によってこれを封印するというものである。封印に先立って書記は、おそらく保存用の控えを作成し、封印・發信の後それを記録した發信日簿を作成する。<sup>(32)</sup>官衛の書記が行う右のような一連の手続きは、おそらく大筋では、皇帝の書記たる尙書においても同様だったと推定して良いであろう。ついで次章では、こうした尙書の職務に中朝官が、どのように關與していたかを検討してゆこう。

## 第四章 中朝官の職務

### 第一節 給事中・諸吏

先に引いた霍光傳の文中には、前後を接續する際に「明旦」とあり、そこからこの記事が連續した二日間の出來事を記していることが明らかであり、そうすると禁中における皇帝と尙書による政務は、毎日行われていたのだと考えられる。さて、それでは中朝官は、日々行われる皇帝と尙書の政務にどのように關與していたのだろうか。『漢儀注』には、

諸そ給事中は日ごとに朝謁を上り、尙書の奏事を平し、分ちて左右曹と爲す。以て殿中に事える有り、故に給事中と曰う。多く名儒・國親が之と爲り、左右顧問を掌る。(『太平御覽』卷三二一所引)

諸吏・給事中は日ごとに朝謁を上り、尙書の奏事を平し、分ちて左右曹と爲す。(百官表注所引)

とあり、諸吏・給事中は毎日、皇帝に拜謁したうえで尙書をめぐる政務に關わっていたことが示される。その際に諸吏や給事中が行う、「尙書の奏事を平す」がどのような行爲かについては、從來明らかにされてこなかったが、私見では、この「平」とは「評」<sup>(33)</sup>と同義であり、また「尙書の奏事」とは尙書が取り次いだ上奏文のことであろう。すわなち諸吏・給事中の職務は、皇帝が上奏文を決裁するにあたって評議し、皇帝の判斷を助けることなのであり、「尙書の事を受ける」諸曹も同様である可能性がある。こうした評議の様相を具體的に示す史料は殘念ながら皆無に近いが、ただ卷七六張敞傳

には、次のようにある。

宣帝は敞を徴して太中大夫と爲し、于定國と並び尙書の事を平せしむ。違を正すを以て大將軍霍光に忤らう。

張敞は中朝官ではなく、「論議を掌る（百官表）」大夫であるが、やはり「尙書の事を平」している。注目すべきは、張敞が領尙書事霍光に對して「違を正すを以て忤らった」という點である。先の霍光傳において、皇帝と尙書がいる場に、領尙書事の霍光と上官桀も同席していたことを考えあわせれば、これは張敞が間接的に漠然と霍光を批判したというのではなく、皇帝の面前において「尙書の奏事」を評議する中で、張敞が霍光を直接論難したのだと見るべきであろう。こうした評議は、官衙における文書作成の過程でも行われており、兒寬が廷尉張湯の從史であつたときのこととして、

時に疑奏有り、已に再び卻けられ、掾史は爲す所を知らず。寬は爲めに其の意を言うに、掾史は因りて寬をして奏を爲さしむ。奏成りて、之を讀みて皆な服し、以て廷尉湯に白す。湯は大いに驚き、寬を召して與に語り、乃ち其の材を奇として、以て掾と爲す。（卷五八兒寬傳）

とある。上奏文の作成にあつて廷尉寺の屬吏たちの間では、おそらくは侃々諤々の議論がなされていたことであろう。なお、前漢後期における中朝官による評議・會議については、すでに永田英正氏がその存在を指摘し、「外朝の責任者たる丞相や御史大夫の非違、非法を糾彈する一種の監察機關としての役割をもっていた」としている。<sup>(35)</sup>ただし永田氏の擧げた事例が、丞相や御史大夫への糾彈という議題からも容易に想像できるように、いわば非常事態への對應を目的とした會議であつたのに對して、筆者がここで指摘する「平尙書奏事」とは、より頻繁に行われる極めて日常的な——それ故に史料に記録されにくい——評議のである。

ところで、こうした日常的な「尙書奏事」をめぐる評議に、給事中・諸史以外の中朝官すなわち侍中・中常侍が参加したか否かについては、それを明確に示す史料は見出せない。また逆に侍中・中常侍については、禁中において皇帝と起臥をとともにする、もしくは宴席に伺候することから、はては便器・痰壺の管理に至るまで、政務以外の場面で皇帝に近侍す

る事例がしばしば見られるのに對して、給事中・諸吏にはそうした例は皆無である。筆者は先に、個々の中朝官はそれぞれ異なる目的に應じて設置されたと推測したが、その理由の一端は、こうした侍中・中常侍と給事中・諸吏との相違なのである。この相違にもとづいて、各々の設置目的を強いて——すでに述べたように、それを明示する史料は存在しない——想定するならば次のようになろう。すなわち給事中という官名にみえる「事」という文字は、しばしば政事もしくは事務の意で用いられており、そこから給事中に求められたのは「尙書奏事」の處理など政治の實務の遂行であり、これに對して、侍中・中常侍には政務云々よりも、むしろ皇帝の身近に「侍ること」それ自體が求められていたのである。<sup>(37)</sup>もとより侍中・中常侍もまた皇帝の政務に關與していたことは、次節に引く史料や他にも多數見えているが、侍中・中常侍が皇帝の傍らで行っていたことは先に見たように様々であり、政務への關與はその一端でしかないと考えるのが妥當であろう。ただしこのことは、皇帝の政務遂行において侍中・中常侍の占める比重が、給事中よりも劣っていたということを意味するわけではない。節を改めて見てゆこう。

## 第二節 侍中・中常侍

二〇世紀初頭の簡牘史料の出土以來、漢代において文書行政が高度に發達していたことは周知の事實となっており、その重要性については言うまでもないが、一方で、ある官衙内部における政務の執行においては、むしろ口頭による意志の傳達がより大きな比重を占めていたのではなかったかと推察される。先の兒寬傳に見えるように、口頭による意志の傳達は「白す」と表現されるが、中朝官がこれを行った事例もしばしば見られるのであり、例えば、

常侍（王）閔は前に大司農中丞たりて、數々、昌陵は成すべからざるを奏し、侍中・衛尉（淳于）長は數々、宜しく早く止めんことを白す。（卷一〇成帝本紀）

左將軍上官桀父子および御史大夫桑弘羊は皆な燕王・蓋主と反を謀り誅され、（大司馬・領尙書事霍）光は朝に舊臣

無きを以て、安世を用て右將軍光祿勳と爲し、以て自らの副たらしめんことを白す。(卷五九張安世傳)

(大司馬・領尙書事王) 莽の權は日々に盛んにして、(大司徒孔) 光は憂懼して出す所を知らず、上書して骸骨を乞う。莽は太后に「帝は幼少なり、宜しく師傅を置くべし」と白し、光を徙して帝の太傅と爲す。(卷八一孔光傳)

新都侯王莽は國に就いて數年、……莽の從弟の成都侯王邑は侍中と爲り、矯りて太皇太后の指と稱して哀帝に白して、莽の爲めに特進・給事中を求む。(卷八六何武傳)

などがそれである。なお、中朝においてこうした「白」によって意見を述べるのは多くの場合、領尙書事もしくは侍中であり、給事中が「白」を行う例は少ないのだが、これは侍中が給事中に比べて、より皇帝に親近な外戚や寵臣が任じられて皇帝の私生活にも關わり得たため、「白」を行う機會が多かったことがその原因であろう。皇帝が最も信賴する者が任じられる領尙書事については言うまでもない。ともあれ、上奏文によるか皇帝による召見を被るかしなければ、自説を皇帝に傳達し得ない一般の官僚とは異なり、禁中において皇帝に近侍する中朝官は、隨時「白」によって自説を陳述できるのである。さらに私生活にまで踏み込んで日々皇帝に近侍することで、その意向を熟知し得る中朝官の言説は、皇帝に對してより大きな影響力を有していたことであろう。<sup>(38)</sup>

また、先に述べたように侍中・中常侍については、「尙書奏事」をめぐる評議への參加が確認できないのだが、これらの官が、文書の處理に關與しなかったわけでは決してない。

霍氏の反を謀るや、憚は先に聞知して、侍中金安上に因りて以聞し、召見されて狀を言う。(卷六六楊憚傳)

語は露すべからざれば、願くは具さに言わんとする所を書して、侍中に因りて陛下に奏す。(卷八五谷永傳)

息夫躬・孫寵等は、中常侍宋弘に因りて上書して東平王雲の祝詛を告す。(卷八六何武傳)

とあるように、侍中・中常侍は、おそらくは尙書を経由せぬ、いわば非公式の徑路によって一般官僚の意見を皇帝に傳達していたのである。しかも、その内容は謀反の告發といった緊急性の高い、もしくは他への露見を避けるべき機密を要す

るようなものであり、侍中・中常侍による上奏文傳達が、尚書を通じての上奏文の取り次ぎに比べて、より重要であった可能性は高い。なお、機密性の高い上奏文としては封事の存在がある。

樂平侯（霍）山は復た尚書の事を領し、相は平恩侯許伯に因りて封事を奏す。（卷七四魏相傳）

魏大夫（御史大夫魏相）は丞相と爲り、數々、燕見して事を言う。平恩侯は侍中金安上等と徑ちに省中に出入す。時

に霍山は自若として尚書を領するも、上は吏民をして封事を奏して、尚書に關せざるを得せしむ。（卷六八霍光傳）

封事とは、宣帝の親政開始後のこととして右に見えるように、尚書および領尚書事を経由せずに皇帝に傳達される上奏のことであり、この後、宣帝は封事によって下情を知ること、霍氏の專權を奪っていくことになるのである。ここで魏相が奉った封事は平恩侯許伯によって宣帝に取り次がれていることから、田中良氏は、この許伯は禁中に入入りしており、封事とは中朝官の手によって皇帝に届けられるものであるとの説を提示する<sup>(39)</sup>。もしそうであるならば、中朝官の機能の一端がさらに明確になるのだが、ただし、許伯は宣帝許皇后の父許廣漢と同一人物（卷七一疏廣傳補注）すなわち宦官であり、また彼には侍中・中常侍などの中朝官を加官された経歴は見出せない。さらに霍光傳にはその後のことを、

上書する者は益々黠く、盡く封事を奏し、輒ち中書令に下して出でて之を取らしめ、尚書に關せず。

と記し、封事が中書令すなわち宦官によって受信されるものとされている。そうすると、許伯が封事を取り次いだのは宦官たるが故であった、と想定することもできるのであり、したがって筆者は、現時點では封事と中朝官の關わりについては判斷を保留としておくのが良いと考える。

以上、皇帝と尚書を中心として行われる政務に、中朝官がどのように關與していたかを検討してきた。再び官衙を譬喩に用いて表現するならば、要するに中朝官は禁中において——少なくとも政務の側面では——、長官たる皇帝と書記官たる尚書とを取りまく長官官房を形成していたのである。この皇帝の官房においては、日常的に尚書によって取り次がれる上奏文の決裁に際しては、給事中・諸吏が評議を通じて皇帝の判斷を補佐し、また侍中・中常侍らは隨時の「白」によつ

て皇帝の政策決定に助言をし、また緊急性・機密性の高い文書を尚書を経ることなく皇帝に取り次ぐことで、政策決定に迅速性をもたらしたのであろう。

### 第三節 領 尚 書 事

周知のように武帝崩御の後、幼少の昭帝が即位し、武帝の遺詔によって霍光・金日磾・上官桀の三人が昭帝を輔佐することになったのが、領尚書事の始まりである。この領尚書事の権限が何にもとづくのかについては、これまでも様々な説が示されているが、なお見解の一致を見ていないようである。ここでは、前節までに検討してきたような、中朝の皇帝の官房としての機能を踏まえた上で、領尚書事の中朝における位置づけについて二三の私見を示したい。ただし、領尚書事の「職掌」については、十分な論證を可能とするような史料は、残念ながら現時点ではほとんど無く、以下に述べることもがらも、あくまで一つの假説でしかないこと豫めお断りしておく。

領尚書事という語が、史書や簡牘史料にみえる「行某官事」という表現に類似するという点については、すでに先行研究においても指摘されている。「行某官事」とは「某官の職務を代行する」の意で、ある官職に就いている者が何らかの理由で不在もしくは缺員であるときに、他の官にあるものが職務を代行する際に用いられる語である。代行される官職は、上は丞相から邊境の都尉や郵候にいたるまで様々だが、いずれも官衙の長官もしくは丞などの長吏である。<sup>(40)</sup>しかし管見の限りでは、書記の職務が他官によって代行されたという事例は見出せず、そうすると領尚書事も、書記である尚書の職務を代行するのではないと考えられる。また、そもそも領尚書事に就任した者は、いずれも三公クラスの高位高官であり、彼らがただか數百石程度の尚書の職務を代行するということも想定しにくい。したがって領尚書事とは「行某官事」のような單純な職務代行ではないであろう。

領尚書事の政務遂行の様相を示す史料としては、第三章にも引いた霍光傳の記事があるが、ここでは、領尚書事の霍

光・上官桀と尚書とが昭帝に近侍しており、上官桀が上奏文の決裁にあたっていたことが記される。さて、皇帝と尚書の関係を官衙の長官と書記とに比定するとすれば、領尚書事は官衙においては何にあたるといえるだろうか。結論から述べるならば、筆者は長官の代行者にあたる、換言すれば領尚書事とは皇帝の代行者であると考えている。ただし、これを例えば「行皇帝事」などと言わぬのは、臣下としてあまりに不遜な表現であり、直接的に言うのを憚ったためだろう。高貴な人物に關わることがらを婉曲的に表現することはしばしば見られる習慣であり、至尊の皇帝に對してはなおさらである。「尚書事」とは、「皇帝が處理すべき尚書に關わる政務」の婉曲表現であらう。

右のように考えるところならば、領尚書事の權限としては、これまで定説とされてきた上奏文の裁可や自らに不利な上奏文を握りつぶすことなどに止まらず、自らの意志を詔書として發することさえできた可能性が高いのである。ただし、同じ職務代行であっても、官衙の長官が缺員である場合などとは異なり、皇帝位が空位になることはまず皆無であり、領尚書事と尚書および中朝官が政務を遂行する場に臨御するか否かにかかわらず、皇帝は禁中に存在しており、領尚書事といえどもその意向に反することはできない。<sup>(42)</sup> 霍光傳にも見えるように、領尚書事上官桀が目論んだ霍光失脚は、昭帝によって阻止されており、上奏文の決裁においても最終的には皇帝の判斷が優先される。筆者が、領尚書事の意志が詔書として發布されうると想定するのも、あくまで制度上の可能性にすぎない。田中良氏のように、領尚書事に就任しながら專權を振るわなかった者が存在することに、何らかの制度的な意義を見出そうとする立場もあるが、<sup>(43)</sup> しかし、領尚書事を評する際にしばしば用いられる、「高宗諒闇、三年言わず」「百官已を總べて以て冢宰に聽く」という『尚書』無逸・伊訓および『論語』憲問にもとづく表現からみて、少なくとも理念の上では、領尚書事とは、皇帝が先帝のために服喪している三年間にのみ期限を限って、政務を代行するものとされていたのであり、後々のことを考えれば專權を振るうことは決して容易なことではない。むしろ、そうした理念にもかかわらず、霍光のように昭帝・宣帝の信任を受けて、二十年にわたって領尚書事として政權を掌握しつづけた例もあるが、專權を振るい得るか否かは結局のところ、その人物が外戚であるか



どうか、將軍を兼任して軍權を掌握しているか、皇帝との個人的な信賴關係、さらには領尙書事個人の性格から皇帝の政治姿勢といった、様々な非制度的な要因によって左右されるのであろう。

## 第五章 中朝の變遷

前章までは、前漢後期における中朝と尙書が、皇帝の日常的な政務にどのように關與していたのかを考察してきた。本章では前漢前期および後漢時代をも視野に入れて、中朝の變遷の概略を示してゆきたい。

中朝の出現が、わずか八歳の昭帝の即位を契機としていたことは既に述べたが、それ以前における皇帝の政務遂行の様相を示す史料として、次のようなものがある。

建は事を上の前に奏するに、卽し言うべき有れば、人を屏けて乃ち言うこと極めて切なり。廷見に至りては、言う能わざる者の如し。(卷四六石建傳)

上嘗て武帳に坐す。黯は前みて事を奏せんとするに、上は冠せず、黯を望見して、帷中に避けて、人をしてその奏を可とす。(卷五〇汲黯傳)

丞相(田蚡)入りて事を奏すに、語りて日に移す、言う所は皆な聽かる。(卷五二田蚡傳)

湯は朝する毎に事を奏して、國家の用を語り、日<sup>く</sup>盱れるも、天子は食を忘れる。(卷五九張湯傳)

と、いずれも武帝時代に公卿が皇帝に謁見して政務を執る例が擧げられる。これがどの程度の頻度でなされていたかは不明だが、少なくとも史料に現れる限りでは、昭帝以後に比べて、武帝時代にはこうした公卿の引見が目につくのである。卷四六石慶傳では、こうした狀況が、

桑弘羊等は利を致し、王溫舒の屬は法を峻にし、兒寬等は文學を推し、九卿は更々進みて事を用う。

と總括される。さらにまた、武帝以前においては禁中という空間自體も、のちの時期ほどには嚴密に外部から隔てられて

はいなかったようである。

昌は嘗て燕に入りて事を奏するに、高帝は方さに戚姫を擁<sup>いた</sup>きたり。昌還り走るに、高帝は逐い得て、昌の項に騎す。上問いて曰く「我は何如なる主なるや」と、昌仰ぎて曰く「陛下は即ち桀紂の主なり」と。(卷四二周昌傳)

高帝は嘗て病み、人を見るを惡み、禁中に臥して、戸者に詔して群臣を入れるを得る無からしむ。(卷四一樊噲傳)

景帝初め立ち、仁を拜して郎中令と爲す。仁は人となり陰重にして泄らさず。……是を以て幸されるを得て、臥内に入る。後宮に於いて祕戲するに、仁は常に旁らに在り、終に言う所無し。(卷四六周仁傳)

これらの史料では、皇帝が宮人とともに居る後宮にさえ、一般の官僚が入り得たことが示される。樊噲傳では大臣を禁中に入れぬため、わざわざ「戸者に詔して」いることから考えて、通常は群臣はとくに斷りもなく禁中に入ることができたのであろう。すなわち武帝以前、官房たる中朝が未だ存在しない時期には、皇帝は自ら公卿を統御しており、抽象的な意味でも具體的な意味でも、皇帝と公卿の關係は直接的かつ開かれたものであった。

昭帝の即位によって、こうした狀況が變化する。即位當初わずか八歳の昭帝には政務遂行能力もなく、禁中において養育されるのみであり、これに代わって、領尚書事霍光らが政務を代行するようになる。それから約二十年を経て霍光が薨去したのち宣帝が親政を開始するにあたっては、

五日に一たび聽事し、丞相より以下は各々職を奉じて事を奏し、以てその言を傳奏し、功能を考試す。……樞機は周密にして、品式は備具し、上下は相い安んじ、苟且の意は有る莫し。(卷八宣帝本紀)

と、皇帝の聽事すなわち皇帝が丞相以下の公卿たちとともに政務を執ることが、五日に一度と規定されている。そうすると親政以前の宣帝および昭帝は、公卿を引見して政務を執るということがほとんど無く、禁中から出ずに領尚書事霍光や中朝官・尚書とのみ政務を執っていたということなのであろう。また、この聽事についての規定は、政務に精勵し前漢王朝を中興したと稱される宣帝でさえ、公卿と直接顔を合わせるのは五日に一度で充分との認識があったこと、そして、中

朝がそれを補うに足るほど官房としての機能を成熟させていたことを示している。ただし筆者は、通説における中朝を政策決定機關、丞相以下の公卿すなわち外朝を單なる執行機關とする理解には従わない。すでに渡邊信一郎氏によって明らかにされているように、前漢後期から後世にいたるまで、最終的な決定権は皇帝が有していたといえ、公卿の會議を通じて官僚機構が意思の形成と表明をするという制度は存在しつづけており、<sup>(45)</sup>外朝が單なる執行機關とする説は成立しがたい。また中朝においては、永田英正氏が指摘したような非常時における會議が行われ、さらに本稿で明らかにしたような、「詔書奏事」をめぐる日常的な評議もなされているが、これもあくまで皇帝による最終的判斷の参考に供するためではない。したがって中朝という機構自体が政策決定権を有していたわけではなく、むしろ諮問機關とも呼ぶべきであろう。後漢以後については、紙幅に餘裕がないため概略を述べるにとどめるが、まず後漢では中朝の制度に大きな改革が加えられる。すなわち、給事中・散騎・諸曹・諸吏は廢止され、<sup>(46)</sup>侍中と中常侍を残すのみとなった。さらに侍中・中常侍は加官であった前漢とは異なり、それぞれ比二千石・千石と官秩が定められた（『續漢書』百官志三）。また中常侍は前漢とは異なり宦官が任じられるようになり、侍中は『續漢書』百官志三に、

左右に侍して衆事を贊導し、顧問應對を掌る。法駕出でれば、則ち多識なる者一人が參乘し、餘は皆な騎して乘輿の車の後に在り。

とあるように散騎の職掌を繼承している。また尙書との関わりで見れば、桓帝時代の尙書朱穆が、

臣聞くならく、漢家の舊典では、侍中・中常侍各一人を置き、尙書の事を省せしむ（注。省は覽なり）。（『後漢書』列傳

三三朱穆傳）

と、侍中・中常侍が「尙書の事を省た<sup>み</sup>」と述べているが、ここである「漢家の舊典」とは、後段との文章のつながりから見て後漢前半期の制度と考えられる。これも前漢では給事中・諸史によってなされていた「平尙書事」の職務が、後漢では侍中・中常侍に繼承されたものであろう。こうした改革は、光武帝による官僚機構全體における整理統合の一環と考

えられるが、別の側面から見れば、前漢における設置の当初には多様な目的・職掌を有していたこれらの官職が、昭帝以後、中朝官としての共通性を徐々に強めていった結果、官職を分けておく必然性がなくなったことを示すのである。

## おわりに

最後に、漢代の中朝と尚書について本稿で考察してきたことを要約すると、次のとおりである。

・前漢において、大司馬・將軍・侍中・中常侍・散騎・諸吏・諸曹・給事中の諸官は多様な「職掌」を有していたが、宮中における皇帝の私的空間たる禁中への出入りを許されていた、という共通性のゆえに中朝官として總稱される。また、皇帝の書記である尚書も禁中において職務を遂行する。

・禁中は、皇帝の私的な生活空間であると同時に政務を執る場所でもあり、これは官衙の便所に相當する。

・皇帝が尚書によって取り次がれた上奏文を決裁するにあたっては、皇帝による判斷の參考とするため、給事中・諸吏などによる「平尚書奏事」すなわち評議が行われる。

・禁中での政務遂行においては、口頭での意思傳達である「白」が大きな比重を占めており、とくに、給事中とは異なり皇帝の私的な生活にも關與し得る侍中・中常侍による「白」は皇帝に多大な影響力を有していたと推測できる。

・また侍中・中常侍は、尚書を経由せぬ非公式の徑路によって、上奏文を皇帝に取り次ぎ、これによって政策決定の迅速性をもたらした。

・右のような機能を有する中朝は、いわば皇帝と尚書を取りまく官房を形成していた。

・領尚書事とは、皇帝の行うべき政務（尚書事）を代行する存在である。

このような前漢後期の中朝および中朝官・尚書が、後世においてどのような變遷を経て唐代の三省へと成長してゆくのかについては、本稿では十分な検討ができなかった後漢時代をも含めて、今後の課題としたい。ただ一つ附言しておくなら

ば、唐代において、中書から下された詔敕を審査し、異議あればこれを修正上還し、また諸官より奉られた上奏文の審査にもあつた門下省の機能については、通説では、皇帝に對して貴族層の意志を代表するものとされている。<sup>(47)</sup>筆者もそれに何ら異論はなく、魏晉南北朝の貴族制政治を経たのちの唐代においては、確かにそうした機能が門下省には備わつていたのである。ただし、門下省とくに給事中が中心となつてなされる詔敕・上奏文の審査という行爲は、その起源が前漢の中朝における給事中による「平尚書奏事」にあつたという點だけは強調しておきたい。

## 註

(1) 先行研究では、『漢書』卷七七劉輔傳注に「中朝、内朝也」とあるのに基づき内朝と呼ぶことが多いが、當時の制度上の用語としては中朝と呼ばれていたようであり、本稿ではこちらを用いる。

(2) 内藤乾吉「唐の三省」(『中國法制史考證』有斐閣、一九六三年)。

(3) 勞榦「論漢代的内朝與外朝」(『勞榦學術論文集中編』上册、藝文印書館、一九七六年)、同「漢代尚書の職任及其和内朝的關係」(『中央研究院歷史語言研究所集刊』五一、一九八〇年)、西嶋定生「武帝の死」(『中國古代國家と東アジア世界』東京大學出版會、一九八三年)、鎌田重雄「漢代の尚書官」(『東洋史研究』二二・四、一九六八年)、山本隆義「中國政治制度の研究」(東洋史研究會、一九六八年)第二章「漢代」など。また、富田健之氏には、「前漢武帝期以降における政治構造の一考察」(『九州大學東洋史論集』九、一九八一年)をはじめとする一連の尚書・中

朝研究があり、その他にも、田中良「領尚書事と「政」の委任」(『鷹陵史學』一四、一九八八年)、藤田高夫「前漢後半期の外戚と官僚機構」(『東洋史研究』四八・四、一九九〇年)、山田勝芳「前漢謁者・中書・尚書考」(『集刊東洋學』六五、一九九一年)などがある。このうち二〇〇〇年までに日本國內において發表された論考については、拙稿「日本における漢代官僚制研究」(『中國史學』一〇、二〇〇〇年)の第五・六章において研究史の整理を行っているので参照されたい。

(4) 「下將軍・中朝者議」(卷七二龔勝傳)、「左將軍彭宣與中朝者」(卷八三朱博傳)、「事下將軍・中朝者」(卷八六王嘉傳)など。

(5) 吉村昌之「前漢の大司馬」(『史泉』八四、一九九六年)。

(6) 藤田高夫「前漢後半期の外戚と官僚機構」(前掲)。

(7) 侍中の初見は呂后時代の侍中張辟彊(卷九七上外戚傳上)であり、武帝中期以降に頻出するようになる。給事中

は武帝初期の東方朔が初見（卷六五東方朔傳）で、昭帝以降から頻出する。散騎は『漢官儀』では秦官、もしくは武帝元鼎三年に置かれたとするが、列傳での初見は降つて宣帝時代の趙平（卷六八霍光傳）であり、諸曹は武帝末の霍光（同上）、諸吏は宣帝時代の任勝（同上）が各々の初見である。中常侍は『漢官儀』では秦官とするが、列傳での初見ははるかに降つて元帝時代の許嘉（卷九元帝本紀）である。なお侍中については、さらに高祖時代の「入漢爲將軍、常侍中」（卷三四盧綰傳）との記事もあるが、ここでは「中に侍す」と動詞として讀むべきであろう。ただし侍中にせよ給事中せよ、當初は「中に侍す」「中に給事する」と動詞として用いられていたものが、徐々に官名として固定していったのであろう。同様の例としては「領尙書事」もある。

（8）前漢における尙書の組織は、長官である尙書令の下に尙書丞・尙書僕射・尙書・尙書郎が置かれていたことが確認できるが、本稿ではとくに必要のない限り、一括して尙書とのみ呼ぶ。前漢における尙書の組織および個々の官職の職務分擔に關しては、後漢とは異なり不明な點が多いからである。

（9）ここに言う明光殿は、『三輔黃圖』卷三に現れる明光宮のことであろう。したがってこの一文は、前漢の制度を記したものと考えられる。

（10）なお鷄舌香を口に含むのは、口臭によって皇帝を不快にさせぬためであり、尙書郎が皇帝のよほど閑近で「事を奏

し」ていたことが知られる。

（11）廬監・女御長は、『漢舊儀』卷下に「婕妤以下皆居掖庭、置令・丞・廬監、宦者。女御長如侍中」とあるように、いずれも掖庭すなわち皇帝の後宮の管理にあたる官である。

（12）程樹德『九朝律考』卷一「漢律考四」。

（13）宣帝時代の領尙書事張安世が、

職典樞機、以謹慎周密自著、外内無聞。每定大政、已決、輒移病出、聞有詔令、乃驚、使吏之丞相府問焉。

自朝廷大臣莫知其與議也。（卷五九張安世傳）

と、領尙書事として政策決定に關與したにもかかわらず、そのことについて素知らぬふりをしたの對して、朝廷の大臣たちがその演技に欺かれたのも、禁中の機密性の高さ故である。

（14）史料の上からも宮殿と一般官衙の構造については、「廷」「東箱（もしくは東廂）」「便殿・便房・便坐」「閣」「閣」などの用語上の類似性が認められる。

（15）大庭脩『漢代官吏の勤務と休暇』（『秦漢法制史の研究』創文社、一九八二年）。

（16）佐原康夫『漢代の官衙と屬吏』（『漢代都市機構の研究』汲古書院、二〇〇二年）。

（17）なお佐原氏の所説では、丞相府については第三の區畫である便坐を長官のプライベートな區畫とする一方で、太守府については閣の内部すなわち第二・第三の區畫が太守の私的な生活空間だったとしており、若干の矛盾があるように見受けられる。私見では、閣とは必ずしも第一の區畫と

第二の區畫の間にある門には限定されるのではなく、第二の區畫と第三の區畫の間にある門もまた閣と呼ばれる場合があったのではないかと考える。その理由としては、宮殿における第三の區畫である禁中への門は、省門あるいは省闥と呼ばれるが、これは門閣とも呼ばれ（前掲昭帝本紀注）、また、

（建初）六年冬、着上疏求朝。明年正月、帝許之。

……着既至、升殿乃拜、天子親答之。其後諸王入宮、

輒以鞶迎、至省閣乃下。（『後漢書』列傳三二東平憲王

劉蒼傳）

と、省閣と呼ばれることもあったからである。さらにまた、前漢武帝の時に東海太守となった汲黯について、

黯多病、臥閣内不出。歲餘、東海大治、稱之。（卷五

○汲黯傳）

とあり、この場合の「閣内」も堂や廷などの第二の區畫を含めるよりも、むしろ第三の區畫である便坐に限定した方が適切であろう。

また、官衙においては前漢後期以降に「門下」と總稱される屬吏が現れて、この便坐に出入りし、「長官のボディガードや祕書、顧問を務める側近グループ」を形成するようになるが（前掲「漢代の官衙と屬吏」、これを皇帝の側近集團たる中朝官と比較することも可能であろう。さらに門下の屬吏の中には、長官が官衙から外出する際にも隨從するものがあり（卷九二萬章傳）、あたかも皇帝の行幸の際に隨從する散騎のごとくである。さらに、こうした官衙

の門下屬吏に比すべき中朝官のうち、侍中・給事中・散騎が唐代に至り門下省という一つの官衙を形成するようになる、という點も大變興味深い。

（18）「專任刑罰、躬操文墨、書斷獄、夜理書、自程決事、日縣石之一（服虔曰、縣、稱也。石、百二十斤也。始皇省讀文書、日以百二十斤爲程）」（卷二三刑法志）。

（19）一般の官衙についてみれば、長官の名で發せられる文書は全てその官衙の書記官が筆寫しており、文書の多くの末尾に書記官の署名が記されていることは、すでに周知の事實であろう。また皇帝や官衙の長官が自ら筆を執つて文書を筆寫した際には、史料には殊更に「手詔」「手書」と記されており、これが特例であることを示している。

（20）「支那の詔敕文と其の起草者」（『東方學報京都』九、一九三八年）。

（21）大庭脩「漢王朝の支配機構」（前掲『秦漢法制史の研究』）、徐世虹「西漢前期の詔書制草制者について」（『史泉』七三、一九九一年）。

（22）大庭脩「居延出土の詔書冊」（前掲『秦漢法制史の研究』）。

（23）臣下の奉つた上奏文に皇帝による裁可の文言「制曰可」が附けられると、その上奏文は制詔としての效力を付與されて公布される。詳しくは大庭脩「漢代制詔の形態」（前掲『秦漢法制史の研究』）参照。

（24）二三例を挙げれば次のとおり。「遂改命舍人草制」（『舊唐書』卷一三五盧杞傳）、「召爲翰林學士。崔胤得罪前一日、

召臻入内殿草制敕」(同卷一七九柳臻傳)、「進中書舍人。……楚草制、其辭有所不合」(『新唐書』卷一六六令狐楚傳)、「武德已後、有溫大雅……上官儀等、時召入草制、未有名目、乾封已後、始號北門學士」(『唐會要』卷五七)。

また『大唐六典』卷九・中書令には、「王言」として冊書(漢簡における冊書とは意味が異なる)・制書・慰勞制書・發日敕・敕旨・論事敕書・敕牒の七種が擧げられているが、このうち冊書・敕牒以外は、中書舍人によって起草されることが唐公式令において示される。

(25) 同様に、唐代においては、尙書省が行った原案具申に對して皇帝が裁可を與えた際の手續きおよび書式は、奏抄式・奏授告身式として規定されているが、これらは前掲『大唐六典』卷九に「王言」として列擧された中には含まれていない。

(26) 大庭脩「漢代制詔の形態」(前掲) 參照。

(27) 『漢舊儀』卷上には「御史大夫寺在司馬門内」とあり、御史大夫の官衙が未央宮内に在ったことは確かだが(司馬門は未央宮の正門)、それ以上のことは不明である。ただし百官表に記すように、御史大夫の下に二人置かれた丞(次官)のうち、御史大夫寺に勤務するものを單に「丞」と稱するのに對して、殿中に勤務するものとくに「中丞」と呼んだことから、御史大夫寺自體は、殿中から見て相對的に「外」に置かれていたと考えられる。

(28) 「資墨」 劾繫都司空。孝景時、嬰嘗受遺詔、曰「事有不便、以便宜論上。」及繫、灌夫罪至族、事日急、諸公莫

敢復明言於上。嬰乃使昆弟子上書言之、幸得召見。書奏、案尙書、大行無遺詔」(卷五一灌夫傳)。

(29) 上欲封祖母傅太后從弟商、崇諫曰……。崇因持詔書案起(注。李奇曰、持當受詔書案起也。師古曰、李說非也、案者即寫詔之文。補注。沈欽韓曰……古者、進食奏書、俱別設案、李說是也。王先謙曰……案非文案之案也)。(卷七七鄭崇傳)。また、「案」の形狀については、林巳奈夫編『漢代の文物』(朋友書店、一九九六年再刊)の圖版5-120を參照。

(30) たとえば居延漢簡には、永田英正氏によって「發信日簿」「受信日簿」と名付けられた、官署における文書の發信と受信を記録した簿籍があるが、これを作成しているのはその官署の書記官である。永田英正「居延漢簡の古文書學的研究」(『居延漢簡の研究』同朋舍、一九八九年)。

(31) また、富田健之氏は「漢時代における尙書體制の形成とその意義」(『東洋史研究』四五―二、一九八六年)において、官僚に對する尙書による「責問」「問狀」「譴問」などの行爲が、「漢一代を通じて尙書の獨占的掌握のもとにある」、「尙書のあり方の本質面を如實に示している」とするが、これも

□尉史志責問士吏□(居延新簡EPT五・一五一)

掾庭謹責問第四候史敞・第八燧長宗、迺癸未、私歸塢壁田舍(同EPT五・一七四)

大將軍長史急責(李)廣之莫府上簿。(卷五四李廣傳)などに見えるように、長官に代わって誰かを問責するのは、



官衙の屬吏の職掌の一つであり、決して尙書が獨占的に掌握する職掌ではない。

- (32) 大庭脩「文書簡の署名と副署試論」(『漢簡研究』同朋舎出版、一九九二年) および拙稿「漢代印章考」(『富谷至編『邊境出土木簡の研究』朋友書店、二〇〇三年) 第二章。

- (33) 「評」字は漢簡には現れず、また『說文解字』にも收録されておらず、漢代にはまだ存在していなかった文字である可能性が高い。三國時代の『廣雅』に至り「評……、平也」(卷三)と、「評」字が收録される。また「平尙書奏事」という表現は魏晉以後にも用いられ續けるが、一方で「評尙書事」(『晉書』卷四三山簡傳、「評尙書奏事」(『魏書』卷二六尉眷傳)と表記する例も現れる。さらに漢代の廷尉の屬官である廷尉平は、後に廷尉評・大理評事と改名される(『通典』卷二五職官典七)。

- (34) 光祿大夫・太中大夫については、拙稿「漢代の光祿勳」(『東洋史研究』五七—一、一九九八年) 參照。

- (35) 永田英正「漢代の集議について」(『東方學報京都』四三、一九七二年)。

- (36) 侍中・中常侍が政務以外で皇帝の生活に關わった例としては、次のようなものがある。

因留侍中。有奇異、輒使爲文、及作賦頌數十篇。(卷六四上嚴助傳)

日碑兩子、賞・建、俱侍中、與昭帝略同年、共臥起。

(卷六八金日磾傳)

賢寵愛日甚、爲駙馬都尉侍中、出則參乘、入御左右、

旬月間賞賜綵鉅萬、貴震朝廷。常與上臥起。嘗晝寢、偏藉上袖、上欲起、賢未覺、不欲動賢、乃斷袖而起。其恩愛至此。(卷九三董賢傳)

後上置酒麒麟殿、賢父子親屬宴飲、王閎兄弟侍中中常侍皆在側。上有酒所、從容視賢笑曰……。(同右)

自大將軍薨後、富平・定陵侯張放・淳于長等始愛幸、出爲微行、行則同輿執轡。入侍禁中、設宴飲之會、及趙・李諸侍中皆引滿舉白、談笑大噱。(卷一〇〇上敘傳上)

侍中……分掌乘輿服物、下至藥器虎子之屬。武帝時、孔安國爲侍中、以其儒者、特聽掌御唾壺、朝廷榮之。

(『後漢書』獻帝本紀注所引『漢官儀』)

- (37) 藤田高夫氏は、給事中は「個人の才能・人格のゆえに登用され」たもので、これを「俊才型」と表する。一方の侍中・中常侍は、外戚・寵臣などの子弟が「血縁關係や寵愛といった皇帝との親近性」ゆえに任用されたものであり、これを「顯貴型」と呼ぶ。前掲「前漢後半期の外戚と官僚機構」。

- (38) この點から見れば、必要の無い限り禁中には留まり得ない侍中以上に、皇帝への影響力を及ぼし得るのは、常時禁中に留まる宦官である。元帝時代に宦官の石顯・弘恭が、領尙書事たる蕭望之・周堪らを抑えて專權を振るった要因を、中書令石顯が尙書を組織的に統御したことに求める立場もあるようだが、筆者には、そうした中書と尙書との間に統屬關係が生じたことを示す史料は見出せない。筆者は

石顯等の專權の要因は、そうした制度的な問題ではなく、

(周堪) 拜爲光祿大夫、秩中二千石、領尙書事。……

顯幹尙書事、尙書五人、皆其黨也。堪希得見、常因顯

白事、事決顯口。(卷三六劉向傳)

元帝被疾、不親政事、……以顯久典事、中人無外黨、

精專可信任、遂委以政。事無小大、因顯白決(卷九三

石顯傳)

などに見えるように、宦官たる石顯等には領尙書事や中朝官以上に、皇帝に對して「白」を行う機會が多く、それ故に元帝に多大な影響力を及ぼし得たからだと考える。また「尙書五人、皆其黨也」に見える「黨」とは、組織的な統屬關係にかかわりなく結託することを意味する語であろう。

(39) 前掲「領尙書事と「政」の委任」。

(40) 例えば「太僕臣賀行御史大夫事」(『史記』卷六〇・三王世家)とは、太僕の官にある公孫賀が御史大夫の職務を代行することを意味する。大庭脩「漢の官吏の兼任」(前掲『秦漢法制史の研究』) 參照。

(41) その理由については必ずしも明確ではないが、官衙には通常複数の書記が居り、たとえその内の一人が缺けたとしても他官が代行する必要はなかったのかもしれない。

(42) それ故に霍光は、昭帝崩御後、一旦は帝位についた昌邑王劉賀を廢せざるを得なくなった際に、領尙書事ではなく大司馬・大將軍として群臣とともに、皇帝に比肩し得る權威である皇太后に奏請することで、ようやく昌邑王廢位を實現することができたのである。

(43) 田中良「領尙書事と「政」の委任」(前掲)では筆者とは反對に、領尙書事の權限を定説よりも小さく評價する。

田中氏は、專權を振るい得ない領尙書事が多く存在することを指摘したうえで、次のように論を展開する。領尙書事の權限は多數の上奏文の中から、皇帝に取り次ぐべきものを豫め取捨選擇することに限られており、これのみでは專權の基盤とはならないが、この「上奏選擇權」とは別に本來皇帝が有する「上奏決裁權」を付託されて、はじめて專權を振るい得たとする。田中氏は史料に「委政」「委任」とあるのが、この付託のことだと解し、これを「政」の委任」と表現する。中書令石顯のように、領尙書事ではない者でも「政」の委任がなされれば、上奏決裁權を背景として領尙書事を凌ぐことができ、霍光や王鳳は、領尙書事であると同時に「政」の委任がなされたために、完全に權力を掌握できたのだとする。以上が田中氏の所説であるが、「委政」「委任」とは確かに皇帝から全幅の信頼を得たことを示すのだろうか、しかし、いわば修辭的表現でしかないこれらの語を、上奏決裁權の付託という制度的な行爲と直接對應させるのには、やはり無理があるように筆者には思われる。また、「委政」がなされたにもかかわらず、專權を振るったとは言い難い丞相匡衡や丞相師丹の例もあり、筆者は賛同しかねる。

(44) 富田健之氏は、中朝の萌芽が武帝時代にあることを指摘しており(前掲「前漢武帝期以降における政治構造の一考察」)、筆者も大筋ではそれに異存ない。ただし、富田氏が

その事例として挙げる、侍中・嚴助・朱買臣らが活動した場は、禁中ではなく公卿の集議においてであり、禁中における皇帝の官房としての中朝の機能は、この時期には未だ現れていないと考えられる。この段階では文字通り萌芽でしかないであろう。

(45) 渡邊信一郎『天空の玉座』（柏書房、一九九六年）第1章「朝政の構造——中國古代國家の會議と朝政——」。

(46) 「給事中、……漢西京置。……漢東京省、魏世復置」  
 『宋書』卷四〇百官志下、「散騎常侍……漢東京初省散騎、而中常侍因用宦者。魏文帝黃初初、置散騎、合於中常侍、謂之散騎常侍」（同上）。諸曹・諸吏についてはその廢止を明示する史料が無いが、給事中・散騎も含めて、いずれも『續漢書』百官志には記載がない。

(47) 内藤乾吉「唐の三省」（前掲）。

# THE *ZHONGCHAO* AND *SHANGSHU* IN THE LAST PERIOD OF THE FORMER HAN, AS SEEN FROM THE VIEWPOINT OF THE DAILY ADMINISTRATION OF THE EMPEROR

YONEDA Takeshi

It is well known that the *zhongchao* 中朝, the inner court which appeared in the era of Zhaodi 昭帝 of the middle period of the Former-Han dynasty, together with the imperial secretaries (*shangshu* 尚書), whose office had appeared previously, became increasingly important to the central government, and with the passage of time and the coming of the Tang dynasty, it flourished and grew into the Sansheng 三省, the central organ of government. However, previous studies have either been conducted from the standpoint of an analysis of the political history of the *zhongchao* or the political relationship between the *zhongchao* and *waichao* 外朝, the outer court. As a result, questions such as what were the duties and functions of the individual offices that made up the *zhongchao*, what sort of space was the *zhongchao* within the palace 宮中, and what was the role the *shangshu* and the officials of the *zhongchao* in carrying out the Emperor's administration, have scarcely been elucidated. This study, based on these considerations, has considered the *zhongchao* systematically and made clear the following points.

- 1) The shared characteristic of the various duties of the office of the *zhongchao* during the Former Han dynasty was the fact that officials were permitted to enter the private space of the emperor, the *jinzhong* 禁中. Moreover, the *shangshu*, the imperial secretary, also conducted his duties within the *jinzhong*.
- 2) The *jinzhong* was at the same time the location where the emperor conducted administrative affairs, corresponding to the private area reserved for the senior officials (*bianzuo* 便坐) in government offices.
- 3) When the emperor ruled on documents delivered to him by the *shangshu*, deliberative meetings known as *pingshangshu zoushi* 平尚書奏事 of palace stewards (*jishizhong* 給事中), inspector of officials (*zhuli* 諸吏) and other officials were held in order to provide reference for the imperial decision.
- 4) In carrying out administrative affairs in the *jinzhong*, oral communication

of opinions occupied a large percentage, and on this point the palace attendants (*shizhong* 侍中) and palace attendant-in-ordinary (*zhongchangshi* 中常侍) had great influence on the emperor.

- 5) Furthermore, the *shizhong* and *zhongchangshi* would report to the emperor unofficially, and in this manner policy making was expedited.
- 6) The *zhongchao* that functioned in this manner formed the secretariat 官房 that was centered on the emperor and the *shangshu*.

## THE TERM FOR PAYING THE RICE-FIELD TAX IN THE EARLY JOSEON DYNASTY, WITH A FOCUS ON SHIPMENT OF GRAIN BY BOAT

ROKUTANDA Yutaka

As a part of a broader study of the rice-field tax 田稅 in the early period of the Joseon dynasty, this study considers what sort of regulations existed at the time regarding the time limit for collected rice-field tax in each region to be sent to the royal capital Hanseong 漢城 and what was the process of its systematization, particularly in the case of transport of grain via the waterways 漕運.

In the case of shipment of the tax by boat, there were two time limits established for the payment of the tax depending on the distance from the capital. The regulation that payment must be completed by the middle of the tenth month that had applied to areas near the royal capital Hanseong, such as Chungcheong-do 忠清道, Hwanghae-do 黃海道, and part of Gangwon-do 江原道 was gradually restricted to a smaller area due to the abuses that were reported from early on, the stipend 頒祿 system was reformed and after 1439 it was no longer necessary to ship the rice-field tax within the year of the harvest, and the rules that had been applied to the provinces far from the capital, such as Jeolla-do 全羅道 and Gyeongsang-do 慶尙道, were applied to the areas near the capital. This meant that tax would be collected in warehouses on the waterways 漕倉 within the year, but that shipment by boat would be carried out in the following year. However, there were many defects in the regulations. Furthermore, because there were no detailed regulations included in *Gyeongguk Daejeon* 經國大典, the fundamental laws of the Joseon dynasty, at the time of its compilation, the revision of regulations took place at the close of the 15<sup>th</sup> century. In the end, deposit of the